

怪談女の輪

泉鏡花

青空文庫

まくら
 枕に就いたのは黄昏の頃、之を逢魔が時、雀色時などと
 いふ一日の内人間の影法師が一番ぼんやりとする時で、
 五時から六時の間に起つたこと、私が十七の秋のはじめ。
 部屋は四疊敷けた。薄暗い縦に長い一室、兩方が襖で
 何室も他の座敷へ出入が出来る。詰り奥の方から一方の襖を開
 けて、一方の襖から玄關へ通抜けられるのであつた。
 一方は明窓の障子がはまつて、其外は疊二疊ばかり
 の、しづくひ叩の池で、金魚も緋鯉も居るのではない。建物
 で取はした此の一棟の其池のある上ばかり大屋根が長方
 形に切開いてあるから雨水が溜つて居る。雨落到敷詰め

た礫こいしには苔こけが生はえて、蛞蝓なめくぢが這はふ、濕しけてじとくする、内うちの
 細君さいくんが元結もとゆひをこゝに棄すてると、三七二十一さんしちにしふいちにち日にして化くわし
 て足卷あしまきと名なづける蠮螋かまきりの腹はらの寄生蟲きせいちゅうとなるといつて塾じゆくせ
 生いは罵のゝしつた。池いけを圍かこんだ三方さんぼうの羽目はめは板いたが外はづれて壁かべがあらは
 れて居ゐた。室數へやかずは總體そうたい十七じゅうしちもあつて、庭にはで取とりまはした大家たいけだけ
 れども、何百年なんびやくねんの古邸ふるやしき、些すこも手てが入はひらないから、鼠ねずみだら
 け、埃ほこりだらけ、草くさだらけ。
 塾生じゆくせいと家族かぞくとが住すんで使つかつてゐるのは三み室まか四よ室まに過すぎな
 い。玄關げんくわんを入はひると十五じふご六ろく疊でふの板敷いたじき、其それへ卓テ子エ椅子ブルを備いす、そな
 へて道場だうぢやうといつた格かくの、英漢えいかん數學すうがくの教場けうぢやうになつて居ゐ
 る。外そとの蜘蛛くもの巢すの奥おくには何なにが住すんでるか、内うちの者ものにも分わかりはせ

なんだ。

そのひ かぞ
其日から數へて丁度一週間前の夜、夜學は無かつた頃で、
ひるま つうがくせい
晝間の通學生は歸つて了ひ、夕飯が濟んで、私の部屋の卓子
うへ とうか
の上で、燈下に美少年録を讀んで居た。

一 體塾では小説が嚴禁なので、うつかり教師に見着かる
いつたいいゆく せうせつ げんきん
一 體塾では小説が嚴禁なので、うつかり教師に見着かる

とおほめたま
と大目玉を喰ふのみならず、此以前も三馬の浮世風呂を一冊
ぼつしう
沒收されて四週間置放しにされたため、貸本屋から嚴

んだん あ
談に逢つて、大金を取られ、目を白くしたことがある。

そのよ けうし
其夜は教師も用達に出掛けて留守であつたから、良落着いて
よ
讀みはじめた。やがて、

にそく
二足つかみの供振を、見返るお夏は手を上げて、
ともぶり
見返るお夏は手を上げて、
なつ
はゞか
憚

りさま
 様やとばかりに、夕暮ゆふぐれ近ちかき野路のぢの雨あめ、思おもふ男をとこと相合あひあひ傘がさの人ひ

とゆまれ
 目稀よこしなる横よこ※、濡ぬれぬ前まへこそ今いまはしも、

とぜんご わきま
 と前後ぜんごも辨わへず讀よんで居ゐると、私わたしの卓子つくこを横よこに附つき着つけてある件くだん
 あかりとり
 の明あかり取とりの障子しやうじへ、ぱら〜と音おとがした。

しの
 忍しのんで小説せうせつを讀よむ内うちは、木きにも萱かやにも心こころを置おいたので、吃びつく

驚おどりして、振ふり返かへると、又またぱら〜とぱら〜といつた。

あめ
 雨あめか不知しら、時ときしも秋あきのはじめなり、洋燈ランプに油あぶらをさす折をりに覗のぞいた

ゆふぐれ
 夕暮ゆふぐれの空そらの模様もやうでは、今夜こんやは眞晝まひるの様やうな月夜つきよでなければならな

おも
 いがと思おもふ内うちも猶なほ其その音おとは絶たえず聞きえる。おや〜裏庭うらにはの榎えのきの

たいぼく
 大木たいぼくの彼あの葉はが散ちり込こむにしては風かぜもないがと、然さう思おもふと、は

おくびやう
 じめは臆おくび病やうで障子しやうじを開あけなかつたのが、今いまは薄氣うすき味み悪わるくな

つて手を拱こまぬいて、思おもはず暗くらい 天てんじやう 井あふを仰みいで耳みみを澄すました。

一分いつぶん、二分にぶん、間あひだを措おいては聞きこえる霰あられのやうな音おとは次第しだいに烈はげし

くなつて、池いけに落おちこ込こむ小こ氷この形勢けいせいも交まじつて、一時いちじは呼い吸きもつかれ

ず、ものも言いはれなかつた。だが、しばらくして少すこし静しづまると、

再ふたびなまけた連れんぞく續ぞくした調子てうしでぱら〜。

家いへの内うちは不の残こらず、寂しんとして居あたが、この音おとを知らしないではなく、

いづれも聲こゑを飲のみんで脈みやくを數かぞへて居あたらしい。

窓まどと筋すぢ斜かひに上うへ下した差さ向むかつて居ある二階にかいから、一いち度ど東とう京きやうに

來きて博はく文ぶん館くわんの店みせで働はたらいて居あたことのある、山田やまだなにかしとい

ふ名代なだいの臆おく病びやうものが、あてもなく、おい〜と沈しづんだ聲こゑでい

つた。

同時に一室措いた奥の居室から震へ聲で、何でせうね。更に、一寸何でせうね。止むことを得ず、えゝ、何ですか、音がしますが、と、之をキツカケに思ひ切つて障子を開けた。池はひつくりかへつても居らず、羽目板も落ちず、壁の破も平時のまゝで、月は形は見えないが光は眞白にさして居る。とばかりで、何事も無く、手早く又障子を閉めた。音はかはらず聞えて留まぬ。

ところ、細君はしどけない寢衣のまゝ、寢かして居たらしい、乳呑兒を眞白な乳のあたりへしつかりと抱いて色を蒼うして出て見えたが、ぴつたり私の椅子の下に坐つて、石のやうに堅くなつて目を睜つて居る。

おい山田やまだ下りて来い、と二階にかいを大聲おほごゑで呼ぶと、ワツといひさ

ま、けたましく、石垣いしがきが崩れるやうにがたびしと駈かけ下りて、

私の部屋わたしへやへ一所いっしょになつた。いづれも一言ひとこともなし。

此上このうへ何事なにごとか起つたら、三人さんにんとも團子だんごに化つてしまつたら

う。

何だか此池このいけを仕切つた屋根やねのあたりで頻しきりに礫つぶてを打つやうな音おと

がしたが、ぐるぐる渦うづを巻まいちや屋根やねの上うへを何なん十じふともない礫つぶて

がひよいゝ駈かけて歩ある行く様やうだつた。をかしいから、俺おれは門もんの處ところ

に立たつて氣きを取とられて居ゐたが、變へんだなあ、うむ、外そとは良い月夜つきよで、

蟲むしの這はふのが見みえるやうだぜ、恐おそろしく寒さむいぢやあないか、と折をりか

ら歸かへつて來きた教師けうしはいつたのである。

さいは びせうねんろく
幸ひ美少年録も見着からず、教師は細君を連れて別室に
去り、音も其ツ切聞えずに濟んだ。

よ 夜が明けると、多勢の通學生をつかまへて、山田が其吹
やう 聴といつたらぬ。鶴が來て池で行水を使つたほどに、事
おほげさ 大袈裟に立到る。

そいつ 其奴引捕へて呉れようと、海陸軍を志願で、クライブ傳
さんかくじゆつ 二三角術などを講じて居る連中が、鐵骨の扇、短刀など
ぢさん を持參で夜更まで詰懸る、近所の仕出屋から自辨で兵糧
とりよ を取寄せる、百目蠟燭を買入るといふ騒動。

しごにちた 四五日経つた、が豪傑連何の仕出したこともなく、無事にあ
しづ 静まつて了つた。

扱さてそのたそがれ
 扱さ其黄昏たそがれは、少すこし風かぜの心こゝろ持もち、私わたしは熱ねつがでて惡寒さむけがしたか
 ら搔かきまききにくるまつて、轉うたねの内も心こゝろが置おかれる小説せつの搜
 索くをされまいたため、貸かしほん本を藏かくしてある件の押おしいれに附くつついて
 寢ねた。眠ねむくはないので、ぱちくりくく目めを睜あいて居ゐても、物ものは幻ぼろし
 に見みえるやうになつて、天てん井じも壁かべも卓テ子エの脚あしも段だん々く消きえて
 行ゆく心こゝろ細ほそさ。
 塾じの山田やまだは、湯ゆに行いつて、教けう場ぢやうにも二階にかいにも誰たれも居をらず、
 物もの音おともしなかつた。枕まくら頭もとへ……ばたばたといふあし音おと、も
 のちかよのけはひる氣勢けしがする。
 枕まくらをかへして、頭つむりをあげた、が誰たれも來きたのではなかつた。
 しばらくすると、再ふたび、しとくしとくと摺すり足あしのかる軽い、譬たと

へば身體からだの無いものが、踵きびすばかり疊たみを踏ふんで來くるかと思おもひ取とられた。また顔かほを上げると何なんにも居をらない。其時そのときは前まへより天窓あたまが重おもかつた、顔かほを上げあげるが物憂ものうかつた。

繰返くりかへして三度さんど、また登音あしおと音がしたが、其時そのときは枕まくらが上あらなかつた。室内しつないの空氣くうきは唯彌たゞいが上うへに蔽おほひ重かさなつて、おのづと重ぢうりや

量うが出來できて壓おさへつけけるやうな!

鼻はなも口くちも切せつななに堪たへられず、手てをもがいて空くうを拂はらひながら呼い吸きも絶たえ／＼に身みを起おこした、足あしが立たつと、思おもはずよろめいて向むかうふすまの襖ふすまへぶつかつたのである。

其まその、押開おしあけると、襖ふすまは開あいたが何なんとなくたてつけに粘ねばり氣けがあるやうに思おもつた。此處こゝでは風かぜが涼すずしからうと、其それを頼たのみに恚かうし

て次の室へ出たのだが矢張蒸暑い、押覆さつたやうで呼吸
 苦しい。

最う一ツ向うの廣室へ行かうと、あへぎく六疊敷を縦に切
 つて行くのだが、瞬く内に凡そ五百里も歩行いたやうに感じて、
 疲勞して堪へられぬ。取纏るものはないのだから、部屋の中
 央に胸を抱いて、立ちながら吻と呼吸をついた。

まあ、彼の恐しい所から何の位離れたらうと思つて怖々と
 振り返ると、ものの五尺とは隔たらぬ私の居室の敷居を跨いで
 明々地に薄紅のぼやけた絹に搦まつて蒼白い女の脚ばかり
 が歩行いて來た。思はず駈け出した私の身體は疊の上をぐるぐ
 まはつたと思つた。其のも一ツの廣室を夢中で突切つたが、暗が

りで二三尺の壁の處へ突當つて行處はない、此處で恐しいものに捕へられるのかと思つて、あはれ神にも佛にも聞えよと、そのかべ其壁を押破らうとして拳こぶしたで敲くと、ぐらくとして開きさうであつた。力を籠て、向うへ押して見たが效がないので、手許へ引くと、颯と開いた。

目を塞いで飛込まうとしたけれども、あかるかつたから驚いて退つた。

唯見ると、床の間も何にもない。心持十疊ばかりもあらうと思はれる一室にぐるりと輪になつて、凡そ二十人餘女が居た。私は目まひがした故か一人も顔は見なかつた。又顔のある者とも思はなかつた。白い乳を出して居るのは胸の處ばかり、背

しろむき
 向むかのは帯おびの結目ゆひめ許ばかり、疊たゝみに手てをついて居ゐるのもあつたし、
 たてひざ
 立膝たちひざをして居ゐるのもあつたと思おもふのと見みるのと瞬またくうち、ずら
 りと居ゐ並みなんだのが一いつ齊せいに私わたしを見みた、と胸むねに應こたへた、爾そのとき時とき、物もの
のすこ
 凄せつい聲こゑ音を揃そろへて、わあといつた、わあといつて笑わらひつけた何なん
たのみ
 とも頼たのまない、譬たとへやうのない聲こゑが、天窓あたまから私わたしを引ひ抱つかへたやう
おも
 に思おもつた。トタンに、背うしろ後ごから私わたしの身からだ體たいを横よこ切ぎつたのは例れいのもの
そのをんな
 で、其その女をんなの脚あしが前まへへつて、眼めさきに見みえた。啊あな呀やといふ間ま
うち
 に内うちへ引ひ摺ずり込まこまれさうになつたので、はツとすると前まへへ倒たふれた。
ねつ
 熱ねつのある身からだ體たいはもんどりを打うつて、元もとのまゝ寢床ねどこの上うへにドツと跳をど
あせ
 汗あせは瀧たきのやうに流ながれて、やがて枕まくらについて綿わたのやうになつて我われに

返つた。奥では頻に嬰兒の泣聲がした。

其から煩ひついて、何時まで経つても治らなかつたから、何もいはないで其の内をさがつた。直ちに忘れるやうに快復したのである。

地方でも其界限は、封建の頃極めて風の悪い土町で、

妙齡の婦人の此處へ連込まれたもの、また通懸つたもの、

況して腰元妾奉公になど行つたものの生きて歸つた例はな

い、とあとで聞いた。殊に件の邸に就いては、種々の話があ

るが、却つて拵事じみるからいふまい。

教師は其あとで、嬰兒が夜泣をして堪へられないといふことで

直に餘所へ越した。幾度も住人が變つて、今度のは久しく住んで

居^ゐるさうである。

明治三十三年二月

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷二十七」岩波書店

1942（昭和17）年10月20日第1刷発行

1988（昭和63）年11月2日第3刷発行

※題名の下にあった年代の注を、最後に移しました。

入力：門田裕志

校正：土屋隆

2007年4月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

怪談女の輪

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>